

唱導史異聞

——日本口承文藝學會に質す——

関山和夫

一、節談説教の変事

『日本口承文藝學會』第四十一回研究例会が、平成十三年四月二十一日（土）午後二時より午後五時まで共立女子短期大学三号館で開催された。其処で、私から見ると、驚くべき椿事が行われたので、まずそのことから述べる。

当日の案内状には次のように記されていた。

内容 実演「節談説教の節と語り」

節談説教

渋谷隆阿僧正

ご紹介とインタビュー

小島美子

真言宗豊山派の節談説教を新たににおこされ、人々をひきつけて放さない魅力的な形に練り上げられた渋谷隆阿僧正を新潟からお招きし、「弘法大師御一代記」などから説教していただき、またどのようにして説得力のあるお話と、ゆたかなメロディと劇的な語りを使い分けて説教されるかをお伺いします。

ぜひ、奪ってご参加くださいますようお願い致します。

日本口承文藝學會 事務局

〒150-8410

唱導史異聞

東京都渋谷区東4-10-28
國學院大学文学部
伝承文学研究室

この案内状を見て、私は一驚を喫した。「節談説教」という呼称は、広義には、ことばに節をつけて行う説教（後述）をいうが、もともと浄土真宗（以下「真宗」と記す）独自のもので、真宗の他の宗派では全く用いていないし、真似も出来ないものだ。それなのに「真言宗豊山派の節談説教を新たににおこされ」とあるのに、まず啞然とした。「新たににおこされ」とはどういう意味か。学会ゆえに事は重大である。

次に「渋谷隆阿僧正」に驚いた。平安・鎌倉時代でもあるまいし、今時「僧正」などと肩書きをつけるのは噴飯物である。これは渋谷氏御自身もやはり面映ゆかったに違いない。僧名、称号、僧階、宗門内の学階などは所属宗派内だけで必要な時に記すもので、およそ外に向かつて誇示するものではない。「日本口承文藝學會」の会員である私は、個人的には僧侶としての立場もあり、これを見て赤面してしまった。（誤解されないように、あえて記す。私は浄土宗西山派の寺の出身で、浄土宗西山流（西谷義）の法脈を相承し、西山浄土宗に僧籍を置いているが、一宗に偏るような寺院生活はしておらず、純粹に説教と話雲の研究家として学究生活に従っているものである。）私は「節談説教とは何か」を理解しないで、知識のないまま渋谷氏

に講演（口演）を依頼した日本口承文藝學會のあり方に大きな疑問を感じた。何故、正統の節談説教伝承者の存在や斯道の研究を無視して、似非節談説教の講師を依頼したのか。本稿で厳しく追及する。今回のこの研究例会の企画が如何に不当なものであったかを学術的に論究したいと思う。本稿に対し、学術的な反論があれば、何時でも受ける。

前後するが平成十三年四月十七日（火）午後六時半から大阪・難波千日前「ワッハ上方演芸ホール」（大阪府立上方演芸資料館）で、萩山祥光氏の節談説教（自称）『弘法大師一代記』なるものが口演された。この公演の聴衆の中には真宗の青年布教家（節談説教研究者）、浄土宗・真宗の若い僧侶らが含まれており、その内容について詳細な報告が私に寄せられた。それによると、この公演は高野山真言宗の『21世紀坊さん委員会』の企画・制作によるもので、説教は意欲的ではあるが芸人気取りで下品であり、「トーク布教」は他宗のものから見ると態度が尊大で、傲慢に見え、不快な感じのものであったし、自称「節談説教」に至っては約三十年前にビクターから出された小沢昭一氏編『また又日本の放浪芸・節談説教』（レコード・後述）所収の寺本明観氏口演『大根屋』を模倣し、「阿弥陀如来」を「弘法大師」に、「南無阿弥陀仏」を「南無大師遍照金剛」に置き換えただけというお粗末なもので、節回しはこのレコードに収められている諸師の中から採った猿まねであるということである。私は参加しなかったが、おおよその察しがつく。節談説教というものは、真宗の他の宗派の僧たちには絶対に真似の出来ないものである（後述）。さらに驚いたことは、この自称節談説教口演者の萩山祥光氏（四十七歳）を印刷物に紹介して「萩山師は長年の研究と研鑽に勤めてこられ」（当日入場者に配られたプログラム）と記されていることだ。四十七歳のお若い僧に「長年の研究と研鑽」というのは言い過ぎではなからうか。そのような若い人に長い歴史の中で真宗の幾多の説教者たちが修練に修練を重ねて作りあげた節談説教がどうして口演出来ようか。仮に萩山氏が

八十歳、九十歳まで節談説教の真似を続けられたとしても、我流による自分一代だけの短い経験では節談説教の真精神は、とうてい理解出来ないものだ。節談の真似は即刻やめて、真言宗の優れた布教法を学ばれるべきである。私は、平成七年度 高野山教師布教研修会に出講させていただき「布教のはじめ」の中で『説教と話芸』と題して、微力ながら説教研究の一端をお話させていただいたことがある。その中で私は、演説体説教の難しさを心をこめて申し上げたのである。（高野山本山布教師会発行『布教のはじめ』平成八年二月二十九日発行）。萩山氏はじめこの『ワッハ上方演芸ホール』の催しに参加された諸氏の今後の謙虚な御精進と布教家としての御大成を心から願ってやまない。

さて論述を日本口承文藝學會第四十一回研究例会の話に戻そう。この例会の模様についてであるが、この会には「節談説教とは何か」を知らない人たちが集まり、似非節談説教を大真面目に聞き、質疑応答の場では、質問者の的外れな発言に対する講師（口演者）の珍答ぶりを、当日参加された有識者から私に詳しい御報告があった。御報告を送られたので、繰返し聴き、私はただただ驚き入っている。それを具体的にここで再現することは紙幅の都合で差し控えるが（示せといわれれば全体を表記することが出来る）、渋谷隆阿氏が関山和夫が拙著『説教の歴史』（岩波新書。今は白水社より刊行発売中）に記していることを引用しながらところどころ私見を加えて述べたのは、私の受け売りであり、有難くもあり、迷惑でもあり、面映ゆくもある。とにかく拙著には反省点もあるのに、これを御参照いただけたことには感謝もする。前半の解説ふうの部分で渋谷氏は「名古屋の祖父江先生に亡くなられる二年ほど前でですけど、今からおよそ出かけて行きました、直接聞きましたら云々」と述べられている。祖父江省念氏を熟知する私が聞くとまことに妙な気持ちになる。祖父江省念氏は、平成八年一月二日に八十八歳で入寂された。それなのに「亡くなられる

二年ほど前ですけど、今からおよそ……とはどういう意味か。それに続いて渋谷氏がいわれている祖父江氏のおことばは私には不可解である。渋谷氏は、真言宗には節談説教の伝承がないことを認めながらも、自分が説教に関心をもつに至ったことを述べておられる。真言宗豊山派の僧の先覚が、真宗や禅宗で学んだことを述べ、その人が真言宗に真宗の説教を導入したのでその影響で「節談」に興味をもった……と真言宗における自分の節談の系譜を明かそうとつとめておられるが、これは全く無意味な話で、逆に真言宗には節談がなかったことを証明する結果となっている。しかも渋谷氏がいわれるその人は、真言宗豊山派の僧として大成されたお方で、説教師として生き抜かれたのではないようだ。渋谷氏の真言宗・節談説教は論外の沙汰である。

さて、この渋谷隆阿氏の節談説教なるものは、明らかに前述・後述のビクターレコード『節談説教』所収の広陵兼純氏ほかの方々の節を採ったもので、発声に無理があり、リズムが乱れ、節回しが崩れる。猿まねであることは余りにもはっきりしている。繰返しいう。「節談説教」という呼称は真宗独自のもので、他の宗派では全くいわない。それをこじつけて今ごろ表へ出ようとするのは、明らかにパフォーマンスだ。私は、かつて大正大学へ出講させていただき、真言宗豊山派・智山派、天台宗、浄土宗の多くの方々から各宗の教化法について学んだことがあるが、「節談説教」ということばを真宗の他の宗派で用いた例は聞いたことも見たこともない。そのような文献的資料は全く無い。もし、あるという人があれば、それは捏造である。「節談説教」という呼称は、あくまでも真宗のものだ。

渋谷氏は、ご自分でも正直に述べておられるが、明らかに真宗の節談説教を真似たものである。『弘法大師御一代記』も真宗の『親鸞聖人御一代記』『蓮如上人御一代記』『法然上人御一代記』を焼き直し、前述の高野山真言宗の例と同じく「南無阿弥陀仏」を「南無大師遍照金剛」に置き換えたものである。それが日本口承文藝學會という立派

な学会で口演されたところに重大な問題がある。『弘法大師御一代記』は、講教師の口演で十分に堪能出来る。渋谷氏がいくら頑張られても芸としては講教師に勝てる筈がない。それならば、講演ふう講話として学問的に話された方がよいのではないか。話芸的には、渋谷氏の話し方は無価値である。発声も、鍛えあげた声ではなく、白声（腹れ声）を真似たもので、自然に身についたものではない。作り声であることは明らかだ。即刻、猿まねはやめるべきだ。

この似非節談説教を大真面目に聴いた参加者から出た外的の質問に対する講師（渋谷氏）のお答えには、学問的な価値は乏しく思われる。およそ研究の対象になり得るものではない。日本口承文藝學會は何故にこのようなことを企画したのか。

二、真宗の節談説教

私は「節談説教の隆替」と題する論考を、上・下に分けて『大法輪』（平成十三年八月号・九月号）に発表したのであるが、今一度その要点をまとめておきたい。

平成十二年六月に市川捷護氏著『回想 日本の放浪芸』（平凡社新書）が出た。『日本の放浪芸』とは、俳優の小沢昭一氏が昭和四十五年から七年間にわたって日本各地に残っていた大道・門付けの諸芸能を訪ねて記録した十二枚のLPレコード（ビクター）である。制作者は市川捷護氏。それが平成十一年十二月にCD化して発売され、再び注目されている。日本文化史研究上の貴重な資料だ。この『日本の放浪芸』の中に『また又日本の放浪芸 節談説教』が含まれている。（最近、『能登の節談説教』も発売された）。

これは、落語・講談・浪花節など話芸の源流を仏教界の説教に探ったもので、その内訳は「フシの魅力」「説教と私」「節談説教を訪ね歩いて」「（節談）説教『信心諍論』川岸不退」「同『加典兄妹』広陵兼

純」「同『大根屋』寺本明親」「同『本願相應の徳』誓山信曉」「同『三十三間堂棟由來』野上猛雄」「同『阿婆樓駄尊者』豊島照丸」「同『忠臣蔵』寺岡平右衛門の段」祖父江省念」「座談会『説教あれこれ』祖父江省念・小沢昭一・関山和夫・永六輔（司会）」となつてゐる。市川捷護氏著『回想 日本放浪芸』には、絶滅寸前の節談説教採録についての苦心談が、豊富な写真を入れて、心のこもつた長文で綴られてゐる。

小沢昭一氏は、「日本の放浪芸」採録のみならず、みずからも節談説教の稽古に励み、「説教板敷山」（『親鸞聖人御一代記』より関山和夫脚色）を口演して、東京・名古屋・京都・大阪・福岡など全国主要都市で多数の聴衆を集めて絶賛を博した。その「節談説教の会」のスタッフ及び公演記録は、次のごとくである。

▲埋もれた芸能史からの招待▼

説教―話芸の源流を探る―

構成 早野寿郎

講演 関山和夫

「説教板敷山」 小沢昭一

「説教忠臣蔵」 祖父江省念

鼎談 永六輔ほか

制作 小川洋三

拙著『説教と話芸』（青蛙房）刊行（昭和39・2）に端を発したこの「節談説教の会」の開催により、長らく学界（学会）でもジャーナリズムの世界でも、現代の宗教界でも全く無視されてきた「節談説教」が注目され、俄かに各方面で取りあげられるようになった。昭和五十年度文化庁芸術祭主催・国立劇場公演「日本音楽の流れ」の語りにも、はじめて節談説教が登場し、祖父江省念氏が出演され、私が解説を執筆した。夢のような歴史のひとつであった。

右の一種の説教ブームが去り、祖父江省念氏が平成八年一月二日に

八十八歳で御入寂になり、再び節談説教は忘れられてしまった。その上、節談説教を生産し、それを教団発展に大いに役立たせた真宗自体が、宗門の近代化の中で節談説教を捨てて新形式の法語を行っているという盲点をついて、前述の真言宗の僧が「節談説教」と自称して我流（自己流）の説教を口演しはじめたのである。それを、こともあろうに日本口承文藝學會や大阪府立上方演芸資料館が取りあげたのは、私から見るとまことに不可解な企画であり、大いに疑念をもたざるを得ない。私は、その責任を厳しく追及する。

「節談説教」は、真宗独自の説教用語であり、その正統伝承者でなければ絶対に真似の出来ない特異な布教法だ。別の宗派のものが「我が宗に節談説教を新たにこした」とか「我が宗で節談説教を確立したい」とかいう、そのような性格のものではない。口演することが良いとか悪いとかいう次元のものではない。我流（自己流）では創始出来ないものだ。日本仏教各宗に、それぞれ優れた伝承があるので、その伝統の上で各自の布教法を創造していくべきである。万一、真言宗の他の宗派のものが、真言声明を盗み取り、そっくりそのまま真似て巧みそうに唱えあげ、わが宗に新しい声明を創造したといつて公演などを行つたら、真言宗の諸氏はこれを黙視出来るか。他宗の良さを学ぶのはよいが、他宗の後塵を拝する必要があるまい。何故「節談説教」といわねばならぬのか。「説教」で十分だ。「節付説教」「節説教」というのはよいが、これは普通名詞である。「節談説教」というのは、本来、真宗が生産した固有名詞である。もし真宗の他の宗派の僧が本気で「節談説教を口演するのは自由だ」などと力説しているとしたら、それは盲点を狙つた売名的なパフォーマンスである。

宗祖親鸞が教えた浄土真宗の法灯を掲げて命がけで大衆を開導したあまたの説教者たち。宗祖の教えを血のにじむ努力によって、長い歴史と伝統の中で修練に修練を重ねて会得した見事な口演技術（節回し）で語り続けた幾多の説教者たちの、地べたを這うような布教活動の苦

しみが、どうしてもわずかな自分一代だけの短い経験しかもたないものに理解出来るようか。

多くの説教者たちは、貧しさに耐えて人生の苦海に沈む人々たちを救った。聞法の宗旨・真宗の説教者たちが、あふれる信心とともに全身を震わせて説いた説教を聴聞しながら、どれほど多くの人々が往生の素懐をとげたことか。祖父江省念氏著『節談説教七十年』（晩聲社）の中に、説教師として辛酸をなめた祖父江師の貴重な体験が記されている。

私は、拙著で常に論述して来たのだが、話芸の成立過程の中に説教（唱導）が含まれていることは確かである。しかし、説教は芸能ではない。節談説教は布教の一つの手段であり、断じて芸能として生じたものではない。あくまでも布教活動である。法芸一如だ。布教活動なるが故に、教化の徹底のために骨を砕いても技術を習得し、仏教学・宗学を学びとらねばならない。

真宗で、一人前の布教師（布教使。説教師。一般的に「説教者」と呼ばれた）になるためには、優れた師匠に入門して随行修行をするか、道場に赴いて学ぶか、どちらかの方法をとる必要があった。

近世から近代にかけて最も有名な説教の専門道場は、播州・東保の福専寺（浄土真宗本願寺派）であり、「東保流説教」といわれた。東保流を開いたのは、福専寺（現兵庫県揖保郡太子町東保）に住した恵門（一七九一—一八六二）であった。彼は若くして京都・西本願寺の学林に学び、仏教学、真宗学を修め、説教にも励み、伝統の方法を学びながら優れた型を完成した。帰国後、福専寺の中に説教道場・獲麟寮を設立し、全国各地から入門して来た多数の子弟を指導した。その全盛時代は、文政・天保（一八一八—一八四四）のころで、東保流の名声は全国に響きわたった。東保流の入門者は真宗各派だけでなく、浄土宗の子弟も間接に教えを請うたほど隆盛であった。（浄土宗の子弟で、真宗の大説教者に師事して随行修行したものもあった。それで

も「節談説教」というのは真宗だけの呼称であって、浄土宗ではいかなかった。）

恵門は、獲麟寮内に研学・説教の二科を設置し、説教技術（節談）を門弟に教授した。（神子上恵龍氏著『東保流説教解説』（すねいる社）。東保流説教には「正宗弁」「流通弁」という宗学的な呼称がある。譬喩、因縁、和讃、和歌などを導入しながらも、この名称を用いたのは、宗学を重要視し、宗意安心の宣揚に苦心した高度な教化の姿勢を示したものである。節談説教のフシは、天台声明に発しており、和讃や御詠歌の調子なども採り、練りに練って伝承したものであることが、架蔵の東保流説教稽古本『譬喩因縁三信章開導説教』のおびただしい書き入れだけでも十分にうかがえる。

真宗の説教は、近代に入ってから名説教者が続出して昭和に及んだ。特に本願寺派の大野義漢、木村徹量、大谷派の宮部円成、服部三智麿らの巨匠は多数の門弟（これを「社中」と呼んだ）をもち、その威勢は絶大なものであった。

近世から近代にかけての節談説教の内容は、東保福専寺著書、椿原真福寺著書、小泉修養文庫、木村徹量述『信疑決判説教』、双亀庵主人著『御伝鈔節談』、田淵静縁著『忠臣蔵四十七席談』、江峯道人著『説教節談賽の河原物語』、江峯菴主人著『結辯百集』、同『滑稽百辯』、同『新しき因縁』、同『新しき譬喩辯』、赤松円純著『譬喩因縁十二支説教』、善沢寛成編『落辯百集』、同『序辯百集』、同『譬喩因縁白骨御文活辯』、同『憐れ悲しき因縁』、同『譬喩因縁涙の種』等々明治・大正期に出版された数々の説教本を見れば容易にわかる。

中でも『信疑決判説教』は、三十席・二百五十種類に及ぶ説教を収録し、説教のテキストとしてよく整理されているが、釈尊伝、七高祖、法然、親鸞、蓮如の一代記はもとより、『浄土三部経』の解釈、真宗教義、法語類のほかに譬喩因縁として能・狂言・浄瑠璃・歌舞伎・落語・講談・浪花節と同じ題材のものが機法一体の話材として導入され、

これらの話が何れも願力成就横超直道の弥陀法に従って展開されるのは、優れた説教者の創案として高く評価されねばならない。

真宗の説教で特異なものは、説教の要素所に聴衆が感動しながら入れる「受け念仏」(あげ念仏)だ。これは説教者の話を高潮させるのに大いに役立つものであった。巧みな説教は巧みな「受け念仏」によって迫力をます。優れた説教を聴聞する群参(説教用語で大勢の参詣人のこと)の中から鯨波のような念仏が起こった時は、まさに最高の宗教的雰囲気がかもしだされたものだ。説教者が高座に端座することとは話し手と聴き手の心構えを決定する上で重要であった。この感極まって発する掛け声のような「受け念仏」は真宗の節談説教の特色の一つで、これも真言宗などでは、とうてい真似が出来ないことだ。

三、節談説教の特異性

ことばに節(抑揚)をつけて行う説教(「節談」という呼称は、真宗で近世後期に用いられるようになったもの)は、恐らく仏教伝来の時からわが国で行われたであろうことは、釈尊一代の説法が「三輪説法」(中に四辯八音あり)、「十二部経」(十二分教)の中に伽陀(諷頌)・尼陀那(因縁)・阿波陀那(譬喩)ありに示されていることを説教(唱導)の型の一つとして教えていることでも推察出来る。また、中国仏教における梁の慧皎撰『高僧伝』卷十三に記す「聲・辯・才・博」などは、日本仏教の唱導(演説体による節付説教)のちの真宗における節談説教の系譜を考える上で重要である。

説教の歴史については、拙著『説教の歴史的研究』に詳述したのでここでは省略するが、文献の上では厩戸皇子の高座説教が古く、次いで『日本霊異記』『感霊録』『東大寺諷誦文稿』などにより上代の説教を察知し得る。中古には「法華八講」が盛行し、説経師(説教師)が活躍し、『二中歴』には説教の「名人」が紹介されている。『枕草子』

『源氏物語』に説教の記事があり、『栄花物語』『今昔物語集』にも特異な説教師が登場する。『法華百座聞書抄』は、平安時代の説教の具体的な内容を示す。『中右記』には説経(説教)のことが多く書かれ、『大鏡』『三宝絵詞』『打聞集』『宝物集』『宇治拾遺物語』などに説教の面白さをしのばせる記事が見える。『玉葉』『明月記』等に説教聴聞の記事が多く見られ、それらによって中古から中世にかけて多種多様な説教の型が作られていたことがわかる。

日本の説教は、時と場合により説経・説法・説戒・唱導・開導・談義・讃歎・法談・勸化・化導・講釈・講談・法座・演説・講演・御座・布教・伝道・教導・法話などの異称をもって歴史的展開をとげた。(本稿では、題名は「唱導史異聞」としたが、「節談説教」について論じているので、統一して「説教」と書く。)「説教」の用字は、既に古く天台大師智顗(五三八―五九七)が『法華玄義』十で「説教之大綱」と述べており、わが国でも『歎異抄』第二章に「釈尊の説教」とあり、親しまれて来たものだが、明治の新政府が公文書に用いてから全宗教界に普及した。要するに説教は、弁舌のあらゆる方法を用いて行われたのである。

源信の『往生要集』は、後世の説教に強い影響を与えたが、説教が庶民層にくいこむ実態を見せつけたのは、平安末期から鎌倉にかけての説教(唱導)の巨匠・澄憲(一一二六―一二〇三)とその子の聖覚(一二六七―一二三五)の出現からであり、法然があらわれるや、顕密諸宗の上代・中古の説教の方法が大きく変貌した。

天台宗における澄憲・聖覚父子の「安居院流」と寛元年間に定円が立てた「三井寺派」は、いわゆる説教の家元的存在として並立し、節付説教(のちの節談説教)は、拙著『説教の歴史的研究』『説教の歴史』で「節談」は「ことばにフシをつけて話す」意であるところから「節付説教」「節説教」をも「節談説教」として扱っている部分がある。広義ではそれでよいが、これは厳密にいうと誤解され易いので説明を

加えておきたいと思っている。私の考えに矛盾はない。) 隆盛に拍車を加えた。『元亨釈書』巻二十九「音甚志」にこの二家のことが見えるが、その記事の中で芸風節付説教隆盛の様子を「変態、自出」といい、説教師が「体や首を揺り動かして歌いあげ、俳優的演技を示す」ということが述べられている。

富樓那尊者の再来を思わせる澄憲の名説教は『元亨釈書』『尊卑分脈』『玉葉』『平家物語』『業實王記』『源平盛衰記』『古今著聞集』『法然上人行狀絵図』等に見え、聖覚の名説教も『明月記』に「濁世富樓那」とあり、「法然上人行狀絵図」「浄土伝燈録」「浄土総系譜」等にも記されている。聖覚は、後世の浄土宗の教学では「説教念仏義の祖」「説法義の祖」と讃えられている(『浄土三國伝集』)。安居院流の説教技術は、後に近世に入ると三井寺派を吸収(三井寺派は説教浄瑠璃(浄土宗)を支配した。節談説教と説教節を混同しないこと)し、浄土宗や真宗で伝えられたが、特に「聞法」「聞即信」を標榜する真宗で伝承された。真宗では、様々な新しい型を創造し、見事な節談説教を作りあげた。因みに高座説教は「せり弁」「はな弁」など特異な技術を伝えた真宗とともに「繰り弁」を誇る日蓮宗でも盛んであった。むろん説教はどの宗派でも行われ、名手を輩出したが「節談説教」という呼称は真宗だけのものだ。

安居院流の話法の奥義は、秘伝・口伝の形で子々孫々に師資相承された(『法則集』他)。後に近世・近代にも真宗の説教で随行制度や台本秘伝が行われたのは、この安居院流の形式を尊重して長く継承したものである。安居院流・三井寺派の芸風節付説教は、派生して数々の芸能を生んだ。

日本仏教各宗の中で、唱導(演説体説教)に関する資料を最も豊富に残したのは真宗であるが、それには様々な要因がある。親鸞が『三帖和讃』など和讃製作に力を注いだことは聞法(説教)の徹底のため有効であった。ことばに節をつけて唱える方法は、物を記憶し、覚

えるためには最良の効果を発揮する。声明の美しい音調を親鸞は採用した。和讃は説教教化の最上の方法の一つである。和讃の四句一首の形式の創造は親鸞苦心の結晶だ。後世、七五調の韻律を活用して見事なフィーリングをきかせた真宗説教独特の節談説教は、親鸞の和讃の影響が絶大であった。節談説教には必ず和讃の一節を、美声をもって、みごとな節をつけて唱える部分があり、ここが最もありがたいとされた。これは親鸞の優れた知恵の発露であった。

節談説教のテキストの中で重要なものは、覚如(一二七〇—一三五)撰『本願寺聖人親鸞聖人御一代記』(『御伝鈔』『御絵伝』)であり、これを基として各種の『親鸞聖人御一代記』が作られた。覚如の『報恩講式』の一文、覚如の子の存覚(一二八—一三七三)が書いた『歎徳文』の名文などは、長く節談説教で愛誦された。

さらに近世から近代にかけて、激しい勢いで他宗を圧倒した真宗の説教の方法を固めたものは、蓮如(一四一—一四九九)であった。蓮如の説教については『蓮如上人御一代記聞書』『山科連書』『蓮如記』『実悟記』等に見えている。蓮如は、まず『御伝鈔』を読むのに聴衆の心をゆるがすような静かで感動的な節づけを考えて自ら実践した。繰返し親鸞の和讃を引用し、ことばの無駄をはぶき、感動的な話し方をするように配慮し、説教の中の和歌の朗詠をすすめた。静かな中にもフィーリングのきいた音声の荘厳を示した。

蓮如の文書伝道は有名だが、講という組織作りにも成功した。蓮如は優れた知性と教養をもちながら説教の特質を見きわめ、出来るだけわかり易く、同じことを繰返し話すようにした。ここに蓮如式説教の特色がある。蓮如は虚々実々の話法の妙味を熟知し、方便の有効な用い方を慎重に説いた。そして説教の聴聞者を非常に大切にした。

蓮如が作った講の組織は、近世に入るとレクリエーションの場となり、説教の会場として繁栄したが、娯楽の殿堂のように世俗化していった。御座(説教の会場)は寄席のように繁盛し、説教者は人気スター

となつてもはやされた。そして、のちの説教所につながつていった。近世における本願寺は東西に分立したが、西本願寺に仲街学林、東本願寺に高倉学寮が創立され、多数の学僧が輩出して宗学は大いに振興した。説教者は教学を背景として活動したが、節談説教は隆盛であった。享保・宝暦・明和の頃にあらわれた本願寺派の菅原智洞、安永・天明・寛政の頃に活躍した大谷派の粟津義圭は多数の説教本の著作をなし、近世後期から近代にかけての真宗説教興隆の基盤を築いた。

中世に既に行われていた古い天台宗の説教の型に「三周の説法」(法説・譬喩・因縁)法華経迹門正宗分の開權顯実の説相がある。この三周の法・譬・喩を応用したものを中味にして、頭に讃題を置き、末尾に結勸(結弁)を置く説教の五段法(讃題・法説・譬喩・因縁・結勸)は真宗説教の誇るべき型で、浄土宗など他宗もこの型を応用した。浄土宗では序論とか序弁とかいう語を用い、結びを合釈(結帰一行)などとも言つて型を伝承したが、基本は真宗の説教に在った。真宗の説教には別に「呼ばわり説教」(呼ばり説教・呼ばり説教)「因縁譬喩説教」という二つの大まかな分け方もあった。

説教者には多くの持ちネタ(話材)があり、節談説教を得意とする説教者の技術は、話芸として優れていたが、反面その芸能性が過度となり、近代社会に生きる宗教として合わない点が出て、やがてこの伝統説教も急激に衰退していった。しかし、大正・昭和初期にも節談説教は、旧来の「能登節」「加賀節」「尾張節」などの型に加えて東保流・椿原流・遠藤流・渥美流・調流・〇〇節などと称する種々の型が発展し、根強く太平洋戦争まで続いた。戦後、随行制度も説教道場も説教所もなくなった。

話芸に徹して能弁を誇示する芸風説教への批判は『元亨釈書』をはじめ古くから一部にはあったが、明治に入って西欧文明の移入、キリスト教の進出、近代学問の進歩の中でますます強くなった。新旧混乱の明治・大正期の布教界の模様は、松岡譲の小説『法城を護る人々』

に活写されている。芸能化し、卑俗化した節談説教を非難する例は、昭和二十八年十一月に出た丹羽文雄の小説『青麦』にもあらわれている。

節談説教衰退については、何よりも近代の真宗に優秀な学僧が続出し、同じ宗門の内部から批判が高まったことを第一にあげるべきだ。近代人の眼には学問的な講演形式の法話の方が立派で高度なものに見えた。そして真宗の指導者たちは、節談説教自粛を呼びかけ、禁止したこともあった。大正元年十二月発行『仏教講義録』第十二号(龍谷学会発行)で、当時本願寺派司教であった弓波瑞明は『布教の本領』の中で「今の布教者たる者、猛省一番、流れて詐偽、俳優の徒と為らざる様、注意せねばならぬ」「卑猥に渉る譬喩因縁を用うべからざる事、譬喩因縁の牽強付会にして非常識なるものを避くべき事、祭文等に類似せる、醜陋の語調を避くべき事、高座、もしくは演壇を乱撃すべからざる事」「倫理に背馳せる因縁談を避くべき事、勉て陳腐を去り、浮華を戒むべき事」と述べている。これにより大正期に入つても節談説教が隆盛であったと同時に、それが時代に合わなくなつて来たことも明瞭にわかるのである。

節談説教衰退については、別の理由もあった。娯楽機関の発展とマス・メディアの発達だ。旧時代の説教者はマスコミの役割も果たした。しかし、報道機関は進歩発展し、教育機関の発達もあり、もはや説教聴聞で娯楽的要求を満たしたり、知識を得るという必要もなくなった。そして今は、新時代に即応した布教法が樹立されつつある。

近代の宗門の指導者たちは、節談を嫌い、その存在を無視し、学問の研究対象にすることは全くなかった。教団発展に尽力した説教者たちは、長い歴史の中で底辺の庶民たちから渴仰されたが、その厳しい生活の実態は評価されることもなく消滅しようとしていた。私は、それを見るにしのびず、節談説教を紹介したところ、幸いにもその文化的役割が再評価された。

節談説教は、真宗が生んだ貴重な文化遺産であり、他宗派の人には絶対に真似の出来ないものだ。それなのに、今ごろ真言宗の僧が自称節談説教を口演するなど、その行為は、はなはだ奇怪なことであり、全く無意味で、時代に逆行した布教法だ。その人が如何に能弁で、素人の耳に巧みに聞こえても、それは猿まねであり、遊戯であり、芸能（げいぎ）人気取りの低級なパフォーマンスにすぎない。

さて、以上、節談説教について筋を通して述べて来た。私が本稿で最も言いたいことは、日本口承文藝學會の研究例会の企画が誤りであり、学会として極めて恥ずかしいものであった責任を厳しく質すものである。繰返しいう。何故、正統の節談説教伝承者（現在も数人おられる）の存在を無視して他の素人に講師を依頼したのか。それは説教の専門研究者として黙過し難い、レベルの低い行為であった。日本口承文藝學會当局者の猛省を促す。

さらに率直に意見を述べさせていただく。まず「真言宗豊山派の節談説教を新たにおこされ」という小島美子氏のこの御発言の根拠をお尋ねしたい。真宗の他の宗派で「節談説教を新たにおこす」ことは不可能なのだ。私は現在、節談説教の正統伝承者でいらっしゃる広陵兼純氏が住職される石川県鳳至郡門前町広岡の真宗大谷派・満覚寺で毎年六月十一日に行われる布教大会に出来るだけ出席して卓抜な節談説教（能登節）を拝聴し、大いに学ばせていただいている。広陵氏は、現在真宗大谷派の第一線布教師（使）として御活躍中である。平成十三年六月十一日は第三十一回の布教大会で、すこぶる盛会であった。その日、広陵氏から聞いたことであるが、最近、小島美子氏が他の御専門のこの取材のため能登へ来られて、広陵氏の節談説教の噂を聞いて御面会の機を得られ、節談の実演をビデオにおさめて帰られたということである。その時まで、小島氏は、広陵氏の節談説教を認識されていなかった（忘却しておられた？）ようである。もし、間違っ

いたら小島氏にお詫びするが、次のことは確実であるので、あえて述べておく。小島氏が広陵氏のことを御存知なかったはずはないからである。

私の手許に国立劇場第九回特別企画公演『日本音楽の特色をさぐる「うたう声・語る声」』という催し（平成五年四月十六日〈金〉六時・国立劇場小劇場）のプログラムがある。前述のごとく、今から三十八年前に私が節談説教を紹介したことにより、昭和五十年文化庁芸術祭主催・国立劇場公演「日本音楽の流れ」『語りもの』に、はじめて節談説教が登場し、故祖父江省念氏が出演され、私が解説を執筆した。それ以来、節談説教が公に認められていた。国立劇場第九回特別企画公演には広陵兼純氏が出演され、節談説教『妙好人大和の清九郎』を口演された。その解説を私が執筆している。この印刷物の全体の紹介文「日本のうたう声・語る声」を小島美子氏が書いておられる。御専門の音楽のお立場での御高説は大いに参考になるが、節談説教が謡曲・民謡・浪曲・長唄・清元節等と全く同列の芸能（音楽）として扱われているのは学術的に見て正当ではない。誤りである。前述のごとく節談説教は、あくまでも布教である。法話なのだ。節談はその手段である。この公演に小島氏はプログラムに御寄稿だけで出席されなかったであろうか。出席されて節談説教が如何なるものかを認識されていたならば、今度の日本口承文藝學會における真言宗僧侶による似非節談説教を、ともに紹介し、インタビューされることはなかった筈である。このことについて、当局者から全面的反省のことが出されない限り、私は、さらに詳細な論致を学界（学会）に発表してその誤りを正しておかねばならない。それが斯道研究に従う学徒の正しい在り方だと考えるからである。

本稿と直接関連する文献

関山和夫の著書・編著

唱導史異聞

著書

『説教と話芸』（青蛙房）

『説教の歴史的研究』（法藏館）

『庶民仏教文化論―民衆教化の諸相―』（法藏館）

『話芸の系譜』（創元社）

『説教の歴史』（岩波新書。現在は白水社）

『庶民芸能と仏教』（大蔵出版）

『落語風俗帳』（白水社）

『落語名人伝』（白水社）

編著

『説教集』（中央公論社『大乘仏典』中30）

（佛教大学教授）